

紹介

徳川家康公伝

日光東照宮は、昭和四十年が徳川家康三百五十年祭に当るのを記念して、中村孝也博士執筆にかかる『徳川家康公伝』を刊行した。すでに公刊された『徳川家光公伝』（広野三郎氏執筆、昭和三十六年刊）、『徳川吉宗公伝』（辻達也氏執筆、昭和三十七年刊）とともに、三部作をなすものという。

中村博士は、大正四年の家康三百年祭にも『東照公伝』を執筆された因縁があり、近くは、家康関係文書を集めた全四巻の大著『徳川家康文書の研究』の著者でもあり、このような仕事については、当代の第一人者といってもよいだろう。本書の枯れた文章を読んでいると、その一行一行に『研究』で裏打ちされた史料の、ずしりとした重みを感じられる。

宮司の序文によれば、執筆者の諒解を得てとくに力点をおいたところは、「(1)家康公の全生涯を総観する」、「(2)近世社会の新秩序を組織した公の偉業、殊に文化面に於ける功績を記述し」、「(3)個人の伝記としては空前というべき詳細年譜を作成し」、「(4)

地図・写真等の図版を豊富に採録し」、「(5)家康公伝の決定版たらしめようとする」とであった。そのねらいは満たされたというべきであろう。

第一章松平族から書き起し、第十八章遠行に終る本伝は、少年時代、三河の統一、遠州経略、駿甲信三州の経略、東海大名、関東大名、関原戦争、將軍補職以前、將軍在職中、大御所時代（一・二）、公武関係、社寺統制、経済政策、外国関係、文教振興の諸章を含み、ほぼ年代を追って記述されている。「先ず文書を主とし、記録をこれに配」する叙述の態度は堅実・厳正で、われわれ若輩のよく口を挿むところではないが、家康の全生涯をこのように包括的に、詳しく、個々の史実の考証にいたるまでを含めて述べた書物は、今後当分は出そうにもない。東照宮刊行の正伝ともいうべきものとなっている。

もつとも、史実の解釈については異論の余地あるものもないではない。たとえば、第十二章四節の「乱を好む勢力」に武士率人群と天主教徒群をあげたのは、前者はともかく、後者はどうであろうか。文章の内容に即していえば、「反徳川政治勢力」とするのが正確であろう。このような点が若干あるが、本書の特徴は文献による史実の

確定にあり、その価値を損うものではない。著者は、本書を「歴史を背景とする伝記たらしめようとした」といっている。個人の存在を性格と環境の相互関係としてとらえる立場から、家康の性格における先天的要素と後天的要素を区別し、その推移を刻々変化する環境の中で説明しようとした。

本伝七一九頁にたいし、二・三二頁におよぶ「徳川家康公詳細年譜」が附されている。「詳細」なる形容詞のつけられたゆえんも、いかにもとうなすかれる内容であり、出典が記されているので、後学が研究の緒をつかむのにすこぶる有益である。このほか、「花押・印章集」・「松平徳川族兜系譜」、人名・地名・社寺名・件名索引と、写真・図版八七葉が収録され、巻末に英文の「徳川家康概観」が収められている。

おなじものが一般向けに『家康伝』として講談社から公刊された。本年八十歳を迎えられた著者は、病軀をおして引続き『家康の族葉』、『家康の臣僚』の著述に従っておられるとのことである。前者は、最近刊行の運びにいたった。著者の健康の回復と著書の完成の一日も早いことを、ともに祈りたい。

（昭和四十年五月 東照宮社務所発行『家康伝』は講談社刊 三八〇〇円）（朝尾直弘）

中国土地・租税資料文庫目録

第一部

もと広島税務監督局の倉庫に眠っていた土地租税関係の歴大な資料が、戦後、広島国税局から広島大学へ寄贈されたということは、近世史研究者の間ではよく知られており、後藤陽一氏の検地帳研究などに利用されて、その片鱗をうかがうことができたのであるが、このほど、目録が完成し、漸く第三者の眼にその全貌が明らかとなった。内容は、中国五県下にわたり、慶長二年以降明治中期におよぶ土地・租税制度に関係するもので、藩政時代の郷帳・村明細帳・免帳・小物成帳以下、明治維新の地租改正関係文書・地券税帳・村別切絵図などを含んでおり、目録は、これらを地域別に県・国・郡・市町村に分類している。

私は、この現物を見たことはないが、目録を一見したかぎりでは、地租改正関係の書類は広島・島根両県に多く、検地帳は出雲国と備後国のそれが各千数百点あって他を庄している。とくに備後の元禄十三年のものは、福山領の全域にわたっているとい

われる。地租改正関係では、本庁命令録や、本庁との往復文書綴・調査報告書類が豊富な資料を提供するであろう。しかし、右以外にも米価・反当収量の調査のほか、幕末維新期の石代取調帳・明治初年の物価表などがあって、広く興味をひく。石見国存在社寺堂取調帳などの史料は、経済史研究者以外にも利用の余地があることを物語っている。元禄十年の出雲国一円本田新田一紙御帳も、内閣文庫の元禄郷帳に出雲のそれがないので、ちょっと見てみたいものである。このほか、未刊の山口県地押沿革史・出雲国租税沿革史などの編修ものもある。

よくもこれだけ多数の貴重な資料が無事に残ったものだと思うが、後藤氏の「あとがき」を読むと、決して無事であったのではないことがわかる。非常な労苦をおかして資料を疎開させ、原爆の惨禍を免れさせた人。連絡の行きちがいがから一旦は反古として払い下げられてしまった資料を、事務処理上の困難をこえて回収に協力した人。資料の学問的価値を説いてそれらの人びとに働きかけた人。これら国税局と大学の多くの人たちの理解と熱意がなくては、今日の資料は陽の目を見なかつただろう。現

在の日本において、資料の保存がいかに個人の偶然的な善意と努力に依存しているかを、よく物語っている。

第二部は、内容による分類目録として刊行される予定という。

(B5判一四〇頁 昭和四十年三月刊 非売品 広島大学附屬図書館発行) (朝尾直弘)